
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

ふか や じょう せき
深 谷 城 跡 (第6次)

1997. 3.

深谷市教育委員会

序

深谷城は、1986年度に第1次調査を実施して以来、市民の皆様のご協力を得て深谷市教育委員会で5度、埼玉県埋蔵文化財調査事業団で1度調査が行われました。その調査成果により深谷城の姿が少しずつですが見えてまいりました。今年度は障子堀の検出された第4次調査区に南接する地点を第6次調査として実施いたしました。調査では第4次調査の障子堀と連続する障子堀が検出され、堀幅が20メートルを超えることが確認されるなど、深谷城がまた違った顔付きになったような気がいたします。また、堀の中からは第4次調査と同様に戦国期の生活用具が多数見つかりました。みつかった碗や皿は、中世から近世に代わる激動期の、人々の生活の様子を、わたしたちに教えてくれます。

今回の発掘調査の成果を発掘調査報告書として市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史や深谷上杉氏の事跡についてご理解を深めていただければ幸いです。

最後になりますが、現地発掘調査および本書の刊行にご協力を賜りました株式会社向井建設ならびに関係者の皆様に、心より感謝の意を表し、序といたします。

深谷市教育委員会

教育長 加藤和説

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市大字深谷551-1 番地における住宅地造成工事に伴う遺跡発掘調査報告である。事業名は深谷城跡第6次発掘調査とした。
2. 発掘調査は株式会社向井建設の委託を受け、深谷市教育委員会が主体となって実施した。
3. 本書の編集および写真撮影は、青木克尚、櫻井和哉が分担して行った。執筆はV章(1)を櫻井が行い、その他は青木が行った。
4. 挿図中の方位は座標北を示す。
5. 出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。
6. 本報告の執筆、編集にあたり下記の方々のご指導をいただいた。(敬称略)
浅野晴樹 鈴木孝之 平田重之 佐々木健策

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	加藤 和説
		教育次長	宮島 良光
事務局	深谷市教育委員会社会教育課	課長	河田記久平
		課長補佐兼文化財保護係長	笠原 和之
		主査	斎藤美恵子
		主事	古池 晋禄
		主事補	冨田 和利
調査担当者	深谷市教育委員会社会教育課	主事	青木 克尚
調査参加者	相澤亮 浅野規子 阿部ルリ子 岩崎節子 宇賀地桂子 岡田初枝 大澤大美 大原黎子 小野寺和子 加瀬律子 西方路容子 里山まり子 島津芳子 滝沢はつえ 高田ハナ 高田秀子 中野文子 根岸邦子 土師澄子 浜野光子 前田悠子 水野みつ子 吉野真由美 山岸早苗 諸岡美樹子 河合詔子 久米紀子 小沼和子 砂田伊久子 都築百合子 細川ケイ 本橋玲子 森光代		

凡 例

1. 縮尺は図中のスケールで示した。
2. 図中に示す方位は座標北を示す。
3. 遺構説明における数値は原則として遺構確認面においてのものである。土層断面図中の水系レベルは、特に記さない限り33.200mである。
4. 遺物観察表についての若干の説明を以下に示すものとする。
 - ・器高に関しては残存高として示した。
 - ・胎土の混有物の表記はアルファベットを用いたが、用法は以下のとおりである。
W…白色粒子 B…黒色粒子 F…鉄 S…砂粒 U…雲母
 - ・残存率は目測による。
5. 写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の番号に対応する。
6. 遺構実測図に使用したスクリーントーンは地山を示す。

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

I. 発掘調査に至る経緯	1
II. 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	1
III. 検出遺構及び出土遺物	4
IV. まとめ	
(1) 深谷城出土の在り系土器について	9
(2) 深谷城の障子堀と秋元越中曲輪について	11

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 深谷上杉氏関連遺跡位置図 (1/20,000)	2
第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)	3
第3図 検出遺構全測図及び土層断面図 (1/120)	5
第4図 出土遺物 (1) (1/3・1/4)	6
第5図 出土遺物 (2) (1/1・1/2)	7
第6図 土器分類図	9
第7図 深谷古城図	10
第8図 深谷城跡推定図 (1/5,000)	11
第9図 深谷城跡検出障子堀 (1/150)	14

I. 発掘調査に至る経緯

深谷城跡はJR深谷駅より北へ約800m、現在の深谷市中心部の北側に位置している。標高は33～35m、北へ向かって傾斜している。城跡は東西500m、南北600m、面積約19.8haに及び、堀や土塁を周囲に巡らせ、本丸を中心に二丸・西丸・北曲輪・越中曲輪・東曲輪・掃部曲輪などの曲輪を回りに配した複郭式の構造を成している。その平面形態が木瓜の花または実の断面に似ているといわれ、別名木瓜城とも呼ばれていた。現在その城域は埼玉県旧跡に指定されている。

深谷城跡はこれまで、市教育委員会により5度、県埋蔵文化財調査事業団により1度発掘調査が実施され、城の縄張りの復元など城の様相が徐々に明らかになりつつある。平成6年度に市教育委員会により行われた第4次調査では部分的ながら障子堀が確認され、瀬戸・美濃系の陶磁器や在地系の皿、内耳土器に混り木製品が良好な状態で出土した（註）。

平成7年12月、第4次調査の調査区に隣接する大字深谷字越中曲輪551-1における住宅地の造成計画が明らかとなり、市教育委員会では申請者である株式会社向井建設（代）向井博道氏との協議を経て、平成8年2月26日当該地の確認調査を実施した。その結果調査地域の一部において遺構を確認した。この結果を踏まえ、市教育委員会は向井博道氏及び県文化財保護課と更に協議を重ね、遺構確認範囲における発掘調査の実施を決定、埋蔵文化財発掘調査通知（平成8年4月3日付深教社発第22号）を提出、準備に入った。

註 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集 「深谷城跡（第4次）」 1996

II. 深谷城の地理的・歴史的環境

深谷市を概観すると、市内中央を走るJR高崎線を境に、北部の妻沼低地と南部の櫛挽台地に分かれている。櫛挽台地は更に櫛挽面と寄居面の2段丘面より構成され、櫛挽面北東端に第3紀層の残丘である標高98mの仙元山が存在するものの、概ね平坦といえる。標高は两段丘面と低地の境界付近で櫛挽面が40～50m、寄居面で32～35m、妻沼低地で30～35mを測り、それぞれが比高差5～12m（櫛挽面）、2～5m（寄居面）を以て接している。深谷城は上述の櫛挽台地櫛挽面の北側縁辺部に位置している。

深谷城はこれまで、市教育委員会や県埋文事業団により調査が実施され、平成6年の県埋文事業団の調査では古墳時代前期の住居跡が確認されている。しかし、それ以降は中世に深谷城が築かれるまで人々の痕跡は見出せない。

南北朝動乱期の14世紀中頃、北関東の新田氏の勢力を抑え、さらに関東から越後への通路確保のため、関東管領上杉憲顕の命により6男憲英が庁鼻和城を築いた。1455年、鎌倉公方足利成氏は関東管領上杉憲忠を滅ぼし、下総国古河に根拠を移し古河公方となり、鎌倉の上杉氏は古河公方勢力との戦闘に備え、太田資清・保資（道灌）親子に命じ江戸城、河越城、岩付城などを築かせた。深谷城もその一環として1456年に深谷上杉氏5代房憲が築いたという説が有力である。その後も足利氏と上杉氏の攻防の中に深谷上杉氏も巻き込まれるが、戦国末期になると小田原北条氏の傘下となり、1590年豊臣秀吉の小田原攻めの際には、前田利家らの大軍が本庄、岡部に迫るに及び深谷城は無血開城された。徳川家康の関東入府後、家康の子や家臣が深谷城主となるが、1626年に廃城となり1692年には深谷城跡の開墾が許可された。開墾が進むにつれ耕地化し、土塁や堀の痕跡を僅かに残し深谷城跡は市街化され、現在に至っている。

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

ふか や じょう せき
深 谷 城 跡 (第6次)

1997. 3.

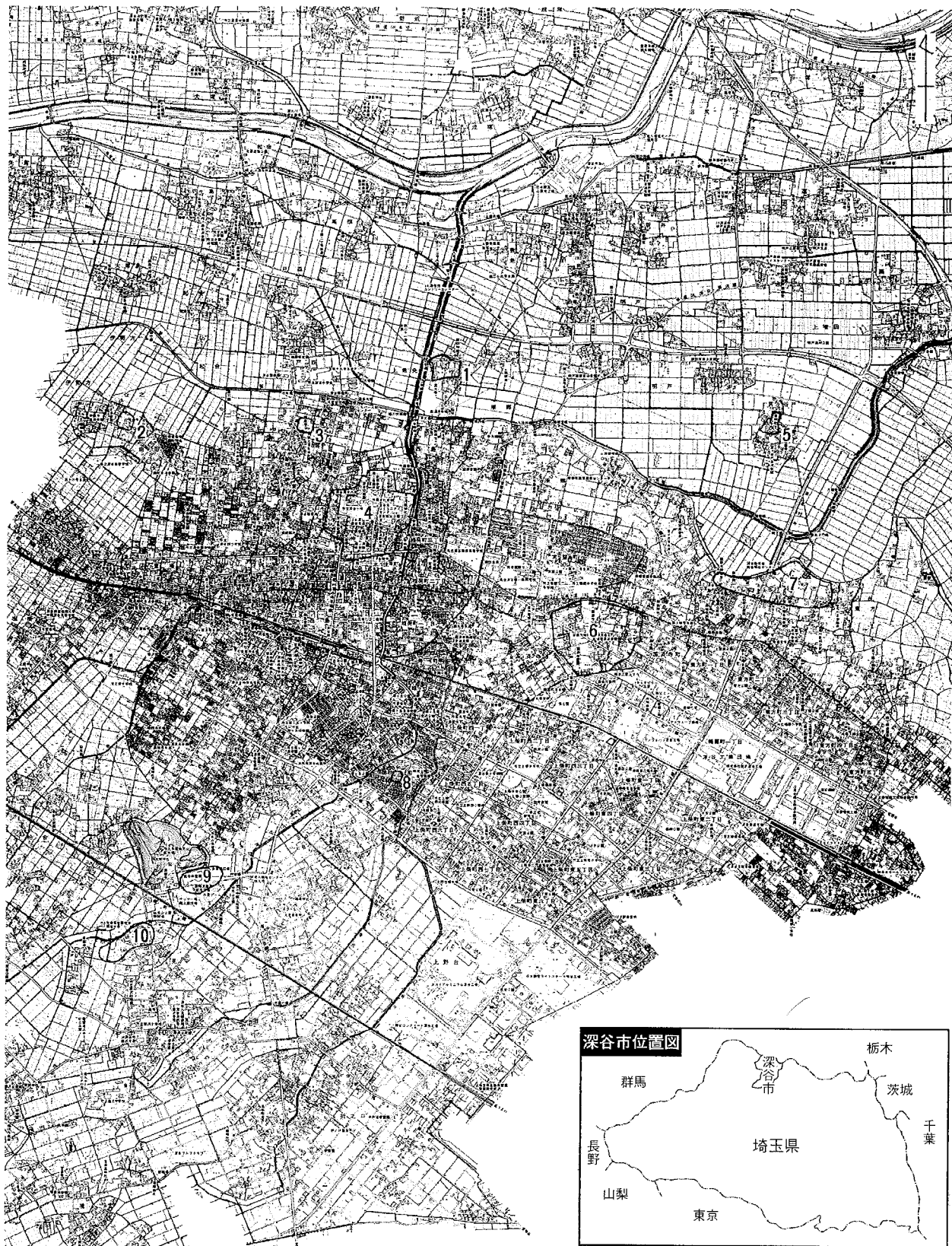
深谷市教育委員会



遺跡遠景（南より）

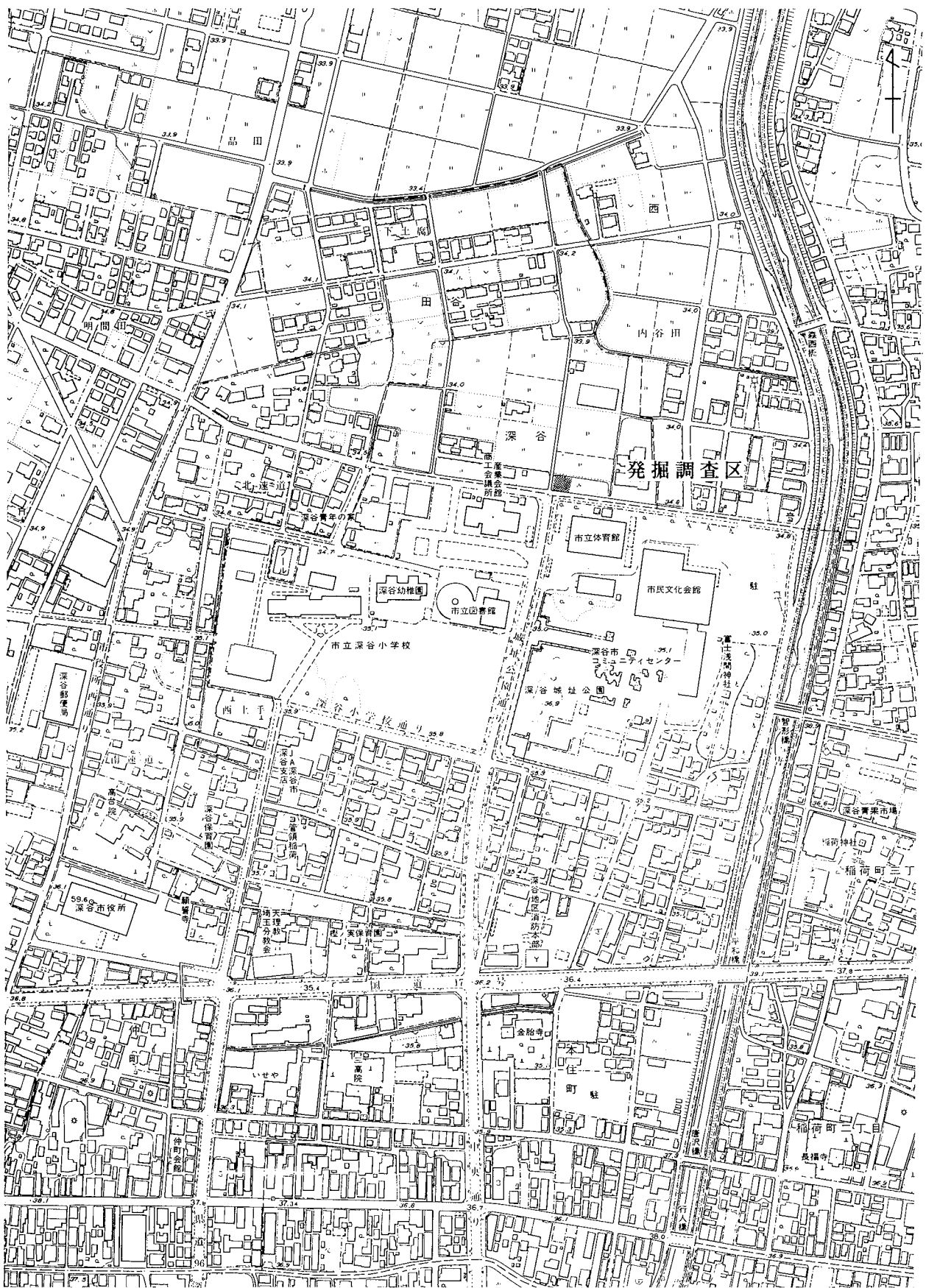


調査区全景



1. 皿沼城跡 2. 曲田城跡 3. 大沼繁忠屋敷跡 4. 深谷城跡 5. 堀の内遺跡
 6. 疋鼻和城跡 7. 東方城跡 8. 秋元氏館跡 9. 押切遺跡 10. 人見館跡

第1図 深谷上杉氏関連遺跡位置図 (1/20,000)



第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

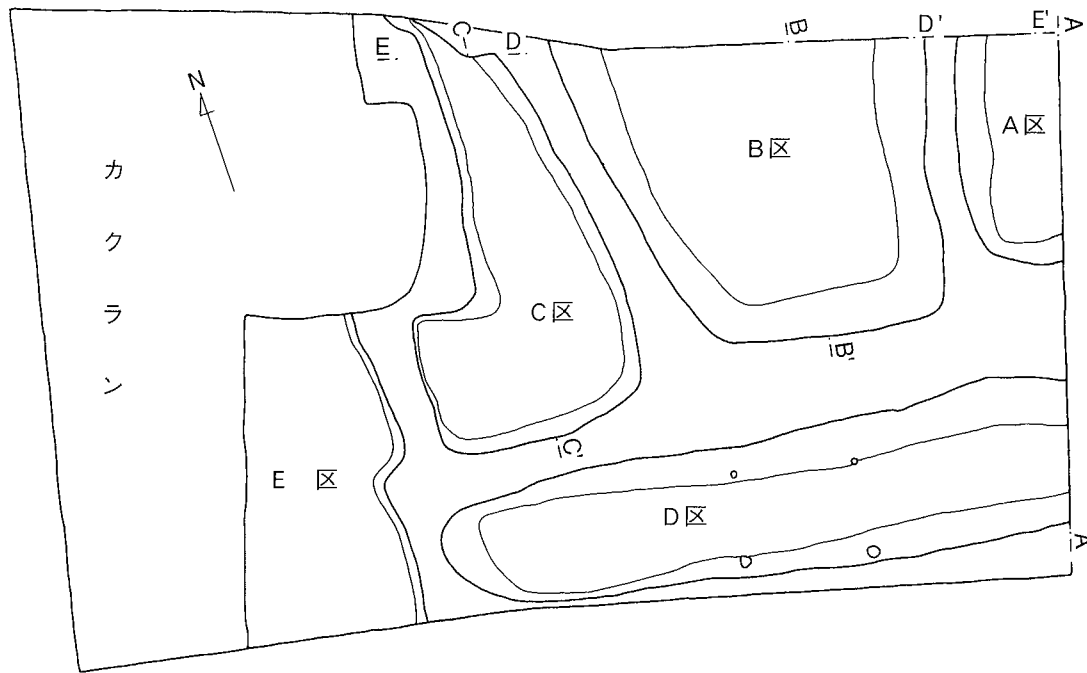
Ⅲ. 検出遺構及び出土遺物

調査区は深谷城の本丸推定地の北に位置する。平成6年度調査の第4次調査の調査区に隣接し、同一の遺構と考えられる障子堀が検出された。本章では検出された障子堀について記述・記載し、遺物については図示し得る遺物についてのみ観察表に示した。

障子堀（第3図～第5図）

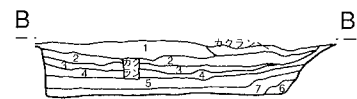
全部で5つの区画が検出された。整然と方形に区画されたとはいえず、台形状や、不整形の区画で、南側に溝状の区画を配す。各区ともに部分的な検出であるために平面形態の比較は難しいが、以下、便宜的に5つの区画をA～E区とし説明する。なお、E区については部分的な検出に加え、後世の破壊がひどく、詳細が不明な点が多い。また、以下の説明文中の数値は全て概数である。

- A区 調査できた区画の大きさは、南北方向に3.6m、東西方向に1.6m。深さは0.3mと浅い。堀底部は浅い凹凸が認められるが、概ねフラットに掘削されている。出土遺物はなかった。
- B区 調査区の中では一番大きく調査できた区画である。調査できた大きさは、南北方向に4.7m、東西方向に6.0m。深さは0.75mと隣接するA区、C区と比べて約40～50cm程深い。堀底部はグライ化のために青灰色を呈し、覆土の最下層は黒味をおびた灰色の粘質土層が堆積していた。若干の崩落土の堆積は認められるが、比較的短期間のうちに区画に粘質土が充満したと考えられ、堀ざらいの痕跡などは見当たらなかった。出土遺物は漆椀、皿、内耳土器、渡来銭、砥石である。
- C区 調査できた区画の大きさは、南北方向に7.0m、東西方向に1.2～3.5mの不整形である。深さは0.3mとA区同様の浅さである。堀底部は概ねフラットに掘削されている。出土遺物はなかった。
- D区 溝状の区画である。南北方向に2～2.5m、東西方向に10mが確認できた。深さ1mを測り、B区同様底部は青灰色を呈し、覆土の最下層は黒味をおびた灰色の粘土層が堆積していた。検出部分の中央付近には4つのピットが確認されたが、調査終了間際での確認であったため、覆土等に関する調査は充分行い得なかった。出土遺物は皿、内耳土器である。
- E区 調査できた区画の大きさは、南北方向に5.0m、東西方向に2.4～3.0mの不整形である。深さは0.2mである。堀底部は概ねフラットに掘削されている。出土遺物はなかった。



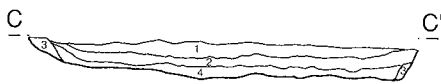
A-A'

1. 暗褐色土
2. 暗灰褐色土
3. 暗灰褐色土 植物根による酸化鉄多し
灰色粘質土をマーブル状に含む
4. 暗灰褐色土 植物根による酸化鉄多し
5. 明灰褐色土
6. 明褐色土 地山の崩落土か
7. 暗灰褐色土 灰色粘質土をマーブル状に含む
8. 灰褐色土 緑色粘土を層状に含む
9. 暗灰褐色土 シルト質粘土
10. 暗灰色土 粘性強



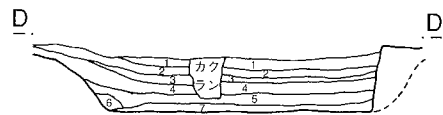
B-B'

1. 黒灰褐色土 粘性強
2. 暗灰褐色土 植物根による酸化鉄多し
3. 暗灰褐色土 植物根による酸化鉄多し パミス質粘土
4. 暗灰褐色土 黄白色粘質土をブロック状に含む
パミス質粘土
5. 暗灰褐色土 黄白色粘質土をブロック状に含む
6. 明褐色土 地山の崩落土か
7. 暗灰褐色土 粘質土を含む



C-C'

1. 黒褐色土 粘性強
2. 暗灰褐色土 明褐色 粘質土をブロック状に含む
植物根による酸化鉄多し
3. 明褐色土 地山の崩落土か
4. 暗灰褐色土 明褐色 植物根による酸化鉄多し



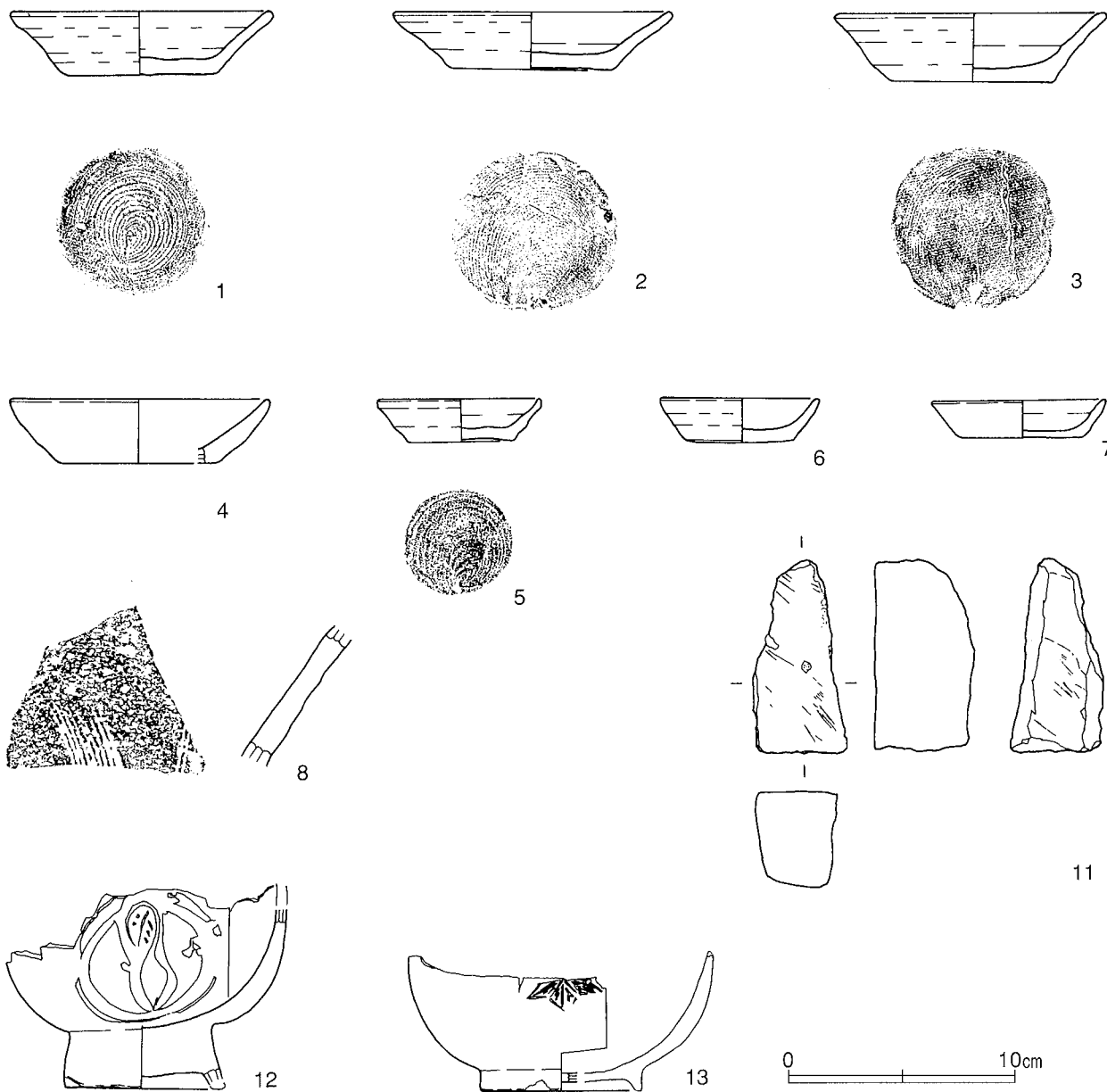
D-D'

1. 黒灰褐色土 粘性強
2. 暗灰褐色土 植物根による酸化鉄多し
3. 暗灰褐色土 植物根による酸化鉄多し パミス質粘土
4. 暗灰褐色土 黄白色粘質土をブロック状に含む パミス質粘土
5. 暗灰褐色土 黄白色粘質土をブロック状に含む
6. 明褐色土 地山の崩落土か
7. 暗灰褐色土 粘質土を含む

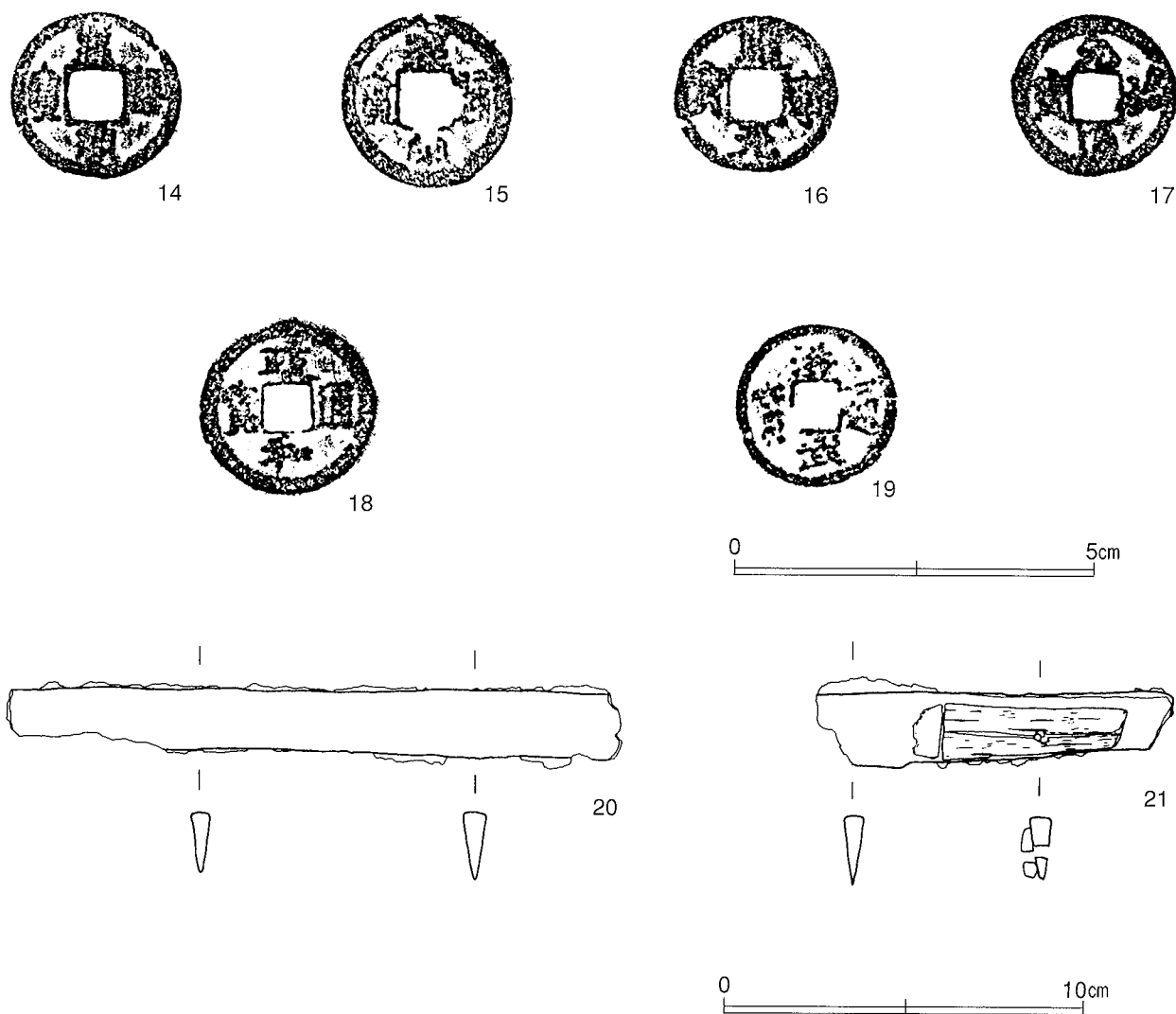


0 5m

第3図 検出遺構全測図及び土層断面図 (1/120)



第4图 出土遺物 (1) (1/3 · 1/4)



第5図 出土遺物(2) (1/1・1/2)

土器観察表

No.	種別	口径	底径	器高	色調	焼成	残存	胎土	出土遺構等
1	皿	11.7	6.5	2.8	橙褐色	良好	95	B S U W	D区。底部回転糸切り。
2	皿	12.4	7.2	2.5	暗黄褐色	良好	80	B S U W	D区。底部回転糸切り。
3	皿	12.1	7.2	3.0	淡黄褐色	良好	95	B S U W	D区。底部回転糸切り。
4	皿	11.6	6.8	2.9	橙褐色	不良	20	B F W	B区。底部回転糸切り。
5	皿	7.3	4.5	1.9	橙褐色	良好	100	B F U W	B区。底部回転糸切り。
6	皿	7.0	4.7	2.0	淡黄褐色	不良	60	B F S U W	B区。底部回転糸切り。
7	皿	7.8	5.4	1.7	橙褐色	不良	90	B F U W	B区。底部回転糸切り。
8	播鉢	—	—	7.0	暗灰色	良好	破片	B F U	B区。瓦質。
9	内耳土器	31.6	28.4	6.9	灰褐色	良好	20	B U W	B区。瓦質。外面煤付着。
10	内耳土器	—	—	4.2	灰白色	良好	破片	B U W	D区。瓦質。外面煤付着。

石製品観察表

No.	種 別	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 記 事 項
11	砥石	8.4	3.8	4.4	220g	凝灰岩	2面が使用され、擦痕が認められる。

漆器観察表

No.	種 別	口径	底径	器高	残存	特 記 事 項
12	椀	—	7.1	8.8	60	内朱外黒。外面・高台内に朱漆による模様が施される。
13	椀	12.5	6.4	6.0	60	内朱外黒。外面・高台内に朱漆による模様が施される。

出土銭観察表

No.	種 別	径	厚 さ	重 量	特 記 事 項
14	皇宋通宝	2.4	0.11	3.2g	初鑄1039年。(北宋)
15	皇宋通宝	2.5	0.11	2.6g	初鑄1039年。(北宋)
16	熙寧元宝	2.3	0.10	2.8g	初鑄1068年。(北宋)
17	元祐通宝	2.4	0.09	2.9g	初鑄1086年。(北宋)
18	政和通宝	2.5	0.10	2.8g	初鑄1119年。(北宋)
19	洪武通宝	2.3	0.08	1.9g	初鑄1368年。(明)

鉄製品観察表

No.	種 別	長 さ	幅	厚 さ	重 量	特 記 事 項
20	刀子	17.1	2.6	0.6	45g	刀身部。
21	刀子	9.9	2.5	0.6	39g	柄。木質の束と目釘が残存。

IV. まとめ

(1) 深谷城出土の在り系土器について

深谷城の発掘調査は、今回の調査を含め7度実施している。平成6年に行われた第4次調査と今回6次の調査区は隣接し、同一の遺構と考えられる障子堀が検出された。第4次調査と、第6次調査の出土遺物で比較的纏まった出土をみた皿と内耳土器は、図示し得たものでも総数50点を数え、製作手法・胎土により多少の分類が可能と思える。そこで、皿と内耳土器等のいわゆる在り系土器を中心に検討し、おおまかな分類を試みたい。

a 皿の分類

図示し得た皿は第4次調査で30点、第6次調査で7点である。これらを概観すると胎土に鉄分、黒色粒子を含むもの、結晶片岩を多く含むものに大別できる。前者を1群・後者を2群とし形態的な特徴・法量による分類を行う。

1群 鉄、黒色粒子を含むもの

A類 体部が直線的に立上がり、口径と器高の比が4：1以上のもの。4次調査の16・17・20・21・23・30～34・37～40が該当する。

B類 体部が内彎気味に立上がるもの。4次調査の12～15・18・19・22・26～29・35・36，6次調査の4が該当する。

2群 結晶片岩を多く含むもの。

A類 体部が直線的に立上がり、口径と器高の比が4：1未満の偏平なもの。4次調査の11・12，6次調査の1～3が該当する。

B類 体部が直線的に立上がるもので口径が7cm～8cmの小型のもの。6次調査の5～7が該当する。

b 内耳土器の分類

図示し得た内耳土器は第4次調査で30点、第6次調査で7点である。これらを形態的な特徴からA・B類の2つに分類する。A類はさらに内耳の位置により2種に細分する。

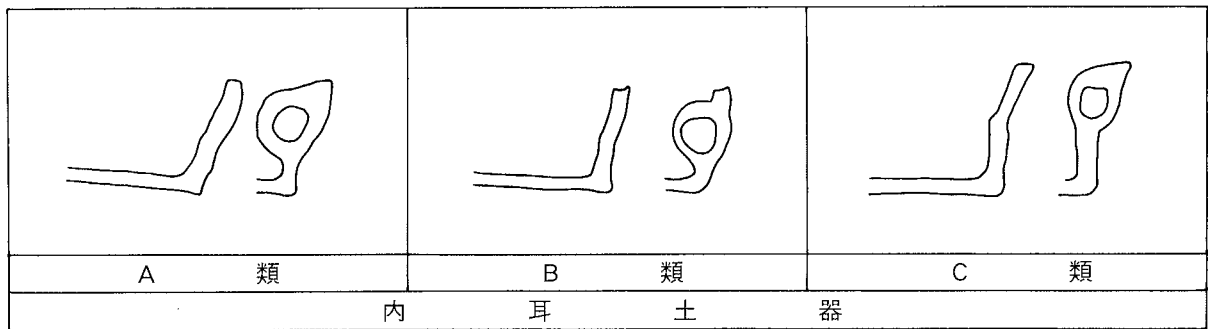
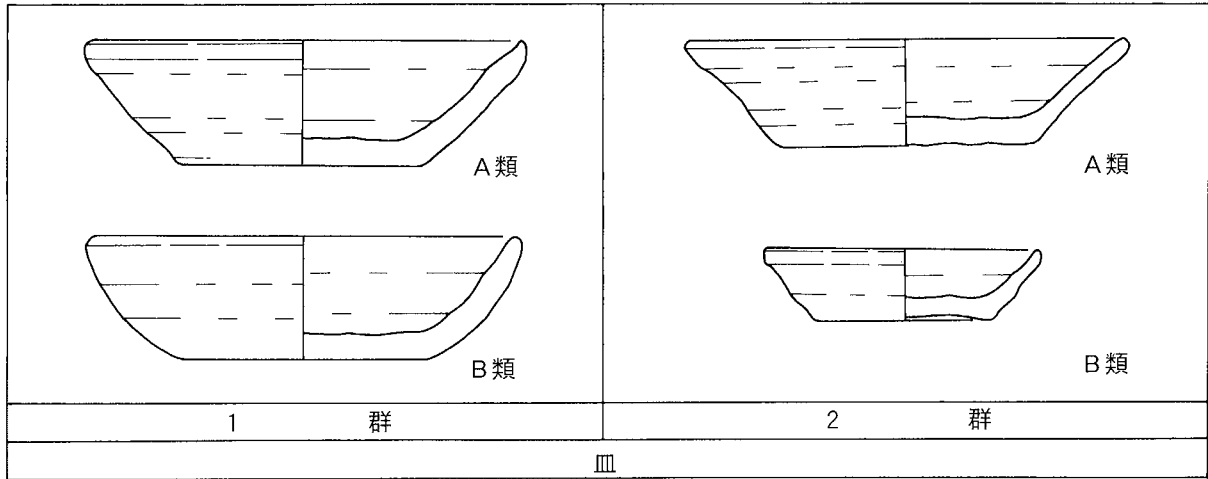
A-1類 ほうろく形で口縁部が内彎気味に立ち、口端部に内耳が貼付けられているもの。4次調査の47・49～52・54～57が該当する。

A-2類 ほうろく形で口縁部が内彎気味に立ち、口端部が凹み体部中位に内耳が貼付けられているもの。4次調査の48・53が該当する。

B類 浅鍋形でA類よりも器高が高く、直線的に立上がり口縁部がやや外反するもの。6次調査の9が該当し、破片ながら10も同類と推定される。

胎土的には黒色粒子を大量に含むものと、結晶片岩を含むものとに大別され、前者はA類と対応関係にあり、後者はB類と対応し、それぞれ相関関係が認められた。

以上の分類を図に纏めたものが第6図である。皿については、日常的に廃棄の対象とされた該期の皿を形態的な違いによって分類することに疑問を呈する声も聞かれるが、今回は胎土と器形が相関的な関係にあるのではないかとということで分類を試みた。胎土では鉄、黒色粒子を含むもの（1群）と、結晶片岩を含むもの（2群）に分類した。その中で、体部が直線的に立ち上がりを見せ、器形の深めなもの（1群A類）と、内彎気味に立ち上がるもの（1群B類）と前者が対応し、体部が直線的で偏平な器形（2群A類）および小型のもの（2群B類）が後者に対応するという違いがあった。2群A・B類は、神川町安保氏館跡（平田ほか1995）などに類例が求められ、埼玉県北西部に分布域が広がる可能性も考えられ



第6図 土器分類図

るが、1群A・B類は分類の枠内においてもそれぞれが個体差に富み、更に細分化する力量は筆者には乏しく分類としてははなはだ不十分といわざるを得ない。

深谷城出土の皿は手捏ね品は見られず、全てがロクロを使用したものである。法量構成をみると口径が7～8cmの小型品、10～12cmの中型品からなり、大型のものはなかった。また、胎土は2種に分けられ、複数の産地からの供給を指摘できるかもしれない。なお、胎土2群が含む結晶片岩は群馬県南西部～埼玉県北西部にかけて分布することが知られ、産地を考える上で参考になるかもしれない。

内耳土器も胎土の違いによって黒色粒子を多量に含むものと結晶片岩を含むものとに大別され、前者は器高が浅く口縁部が内彎気味に立つA類と対応し、後者は前者は器高が深く直線的な器形で口縁部がやや外反するB類と対応することが確認された。

深谷城においてはA-1類が主体的であり、A-2類、B類は客体的である。A-1類は騎西城・花崎城・太田市浜町屋敷C地点・境町下淵名塚越遺跡などで出土が認められ、利根川を中心とした北埼玉・南群馬において類例を求めることができる。客体的であるB類は皿の2群と同じ結晶片岩を含むため、ある程度の地域を推測することは可能と思われる。

皿・内耳土器の年代は、4次調査で供伴した瀬戸・美濃系の天目茶碗・灰釉皿から判断すれば、いずれも大窯2～3期に該当するもので、特に4次の8・9は16世紀半ばに比定される。皿の2群A・B類も、前述のとおり安部氏館跡等に類例が求められ、16世紀中～後半の年代が与えられている。内耳土器A-1類は騎西城、花崎城出土資料との関連から16世紀後葉に位置付けられ、B類も16世紀後半の高崎市下佐野遺跡出土資料に近い形態である。搬入陶磁器の年代観と在郷土器の年代観に大きな齟齬は見当たらず、16世紀中～後半で年代的なまとまりをみることができるといえる。

(2) 深谷城の障子堀と秋元越中曲輪について

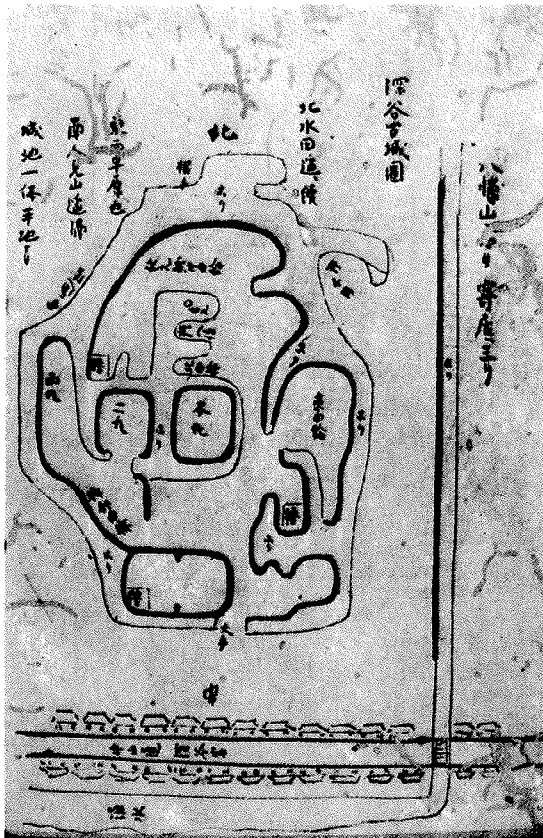
障子堀は第4次・第6次調査区を合わせると合計2列、7つの方形区画と溝状区画が1状確認できた。確認面からの深さは0.2～1mで、浅い区画と深く掘り下げた区画が連続している。第4次調査で検出された溝状の遺構を障子堀の一部とすればその幅は30mを測り、それを除外して考えても20mを超える。土塁は検出されず堀幅については推定の域は出ないが、少なくとも20mを超える堀幅が検出されたことになる。

この堀を寛政年間に編まれた『武蔵志』所載の深谷古城図(第7図)と合わせてみると、概ね、本丸から北へ延び、越中曲輪を画するF字状の堀の部分と考えられる。深谷城はこれまで外堀および本丸を画す内堀が調査されているが、障子堀は検出されていない。構築に至る性格差や時期の相違等が考えられるが、現存する文献資料では具体的に障子堀を構築したという記述はみられない。

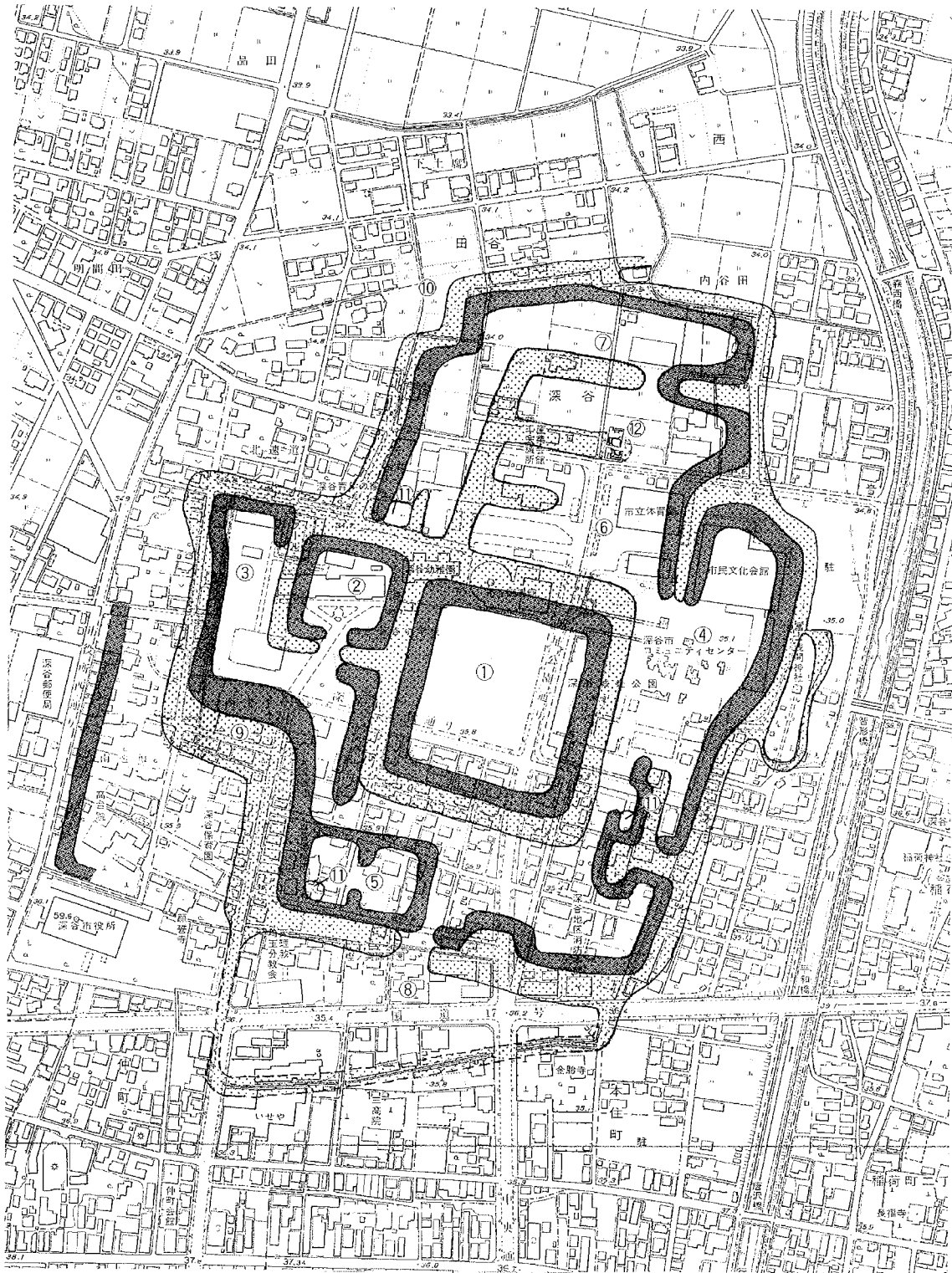
障子堀は神奈川県小田原城・静岡県山中城・長久保城・蕪山城・下田城など、伊豆・駿河に分布し、16世紀後半以降、秀吉の小田原攻めに備えて後北条氏により普請されたものといわれている。昭和56年には山中城の整備が終了し、その圧倒的な迫力を見るものに障子堀＝後北条氏というイメージを植え付けるには十分であった。実際、埼玉県内でも障子堀のある城として知られるのは岩付城・騎西城・花崎城・伊奈氏屋敷跡(伊奈城)などであり、後北条氏系の城に多い傾向にある。しかし、鉢形城・松山城・河越城など数多あるその他の後北条氏系の城にまだ検出されない状況があり、後北条氏系というだけでは説明がつかない。また、山中城などにみられるように2m近い深さを持ち、断面V字状の形態は埼玉県内ではみられず、出土遺物などからはむしろ先行する時期に構築されたと判断される遺構も多い

(渡辺1982,酒井1984)。一概に障子堀といっても最近の用語概念では堀の中に仕切り・障害のあるものを指し、その形態的特徴は一樣とは言えず、軍学書では堀底に逆茂木を立てて障害物としているものも障子堀とされる。小田原城や山中城の障子堀はその発展したものと解釈できる。

検出された障子堀は『武蔵志』古城図で「北曲輪」若しくはその北の「八幡」宮の辺りに位置し、その更に北方には「秋元越中曲輪」の文字がみえる。また、『新編武蔵風土記稿(以下風土記稿)』によれば「北曲輪ノ内最北へヨリタル邊ヲ秋元越中曲輪ト唱フコハ上杉ノ家人秋元越中守長朝居シ所ナレバ呼名トスルトイヘリ(後略)」と記されている。現在の小字では調査地点は越中曲輪となっていてその北に字北曲輪がある。いずれにしても越中曲輪と北曲輪の境は明確でなく、風土記稿の記載に沿って考えれば、本丸の北に大きく北曲輪があり、その一部を越中曲輪と称していたとも考えられる。



第7図 深谷古城図



土塁
 堀

1. 本丸 2. 二丸? 3. 西丸? 4. 東曲輪 5. 掃部屋敷 (掃部曲輪?)
 6. 北曲輪? (越中曲輪?) 7. 秋元越中曲輪? (北曲輪?) 8. 大手
 9. 管領池 10. 搦手 11. 櫓 12. 第4次・第6次調査区

第8図 深谷城跡推定図 (1/5,000)

文中にみえる秋元越中守長朝は父景朝と共に深谷上杉家に仕え（『秋元家譜』『寛政重修諸家譜』）、天正18年（1590）の深谷城開城まで深谷上杉家の重臣として活躍した。家康関東入府後は家康に仕え、上野惣社6千石を領した。その後の秋元家の躍進には目を見張るものがあり、河越藩・山形藩等の藩主を経て、幕末には館林藩6万石の大名となっていた。

秋元氏はもと、鎌倉時代の武将宇都宮頼綱の子泰業が上総国周准郡秋元庄（現君津市）を領して秋元氏を併称し秋元庄小糸に城を構え、それより7代後の師朝の代から秋元を名乗ったという（『藩翰譜』『寛政重修諸家譜』『秋錦録』）。『秋元家譜』『寛政重修諸家譜』等多くの資料で景朝の代で秋元庄を出たと記されているが、『鎌倉大草紙』に、「上杉方岡部原へ出合火出るほどに戦いける。上杉方には井草左衛門尉。久下。秋本を始として残りずくなく討なされ悉負軍す。」という、康正2年（1456）10月の古河公方足利成氏と上杉方との戦闘の記載がある。文中に見える『秋本』は『秋元』と同一と思われるが、康正2年当時には久下氏と同様に深谷上杉に仕えていなくとも、上杉管領家方には属していたと思われる。

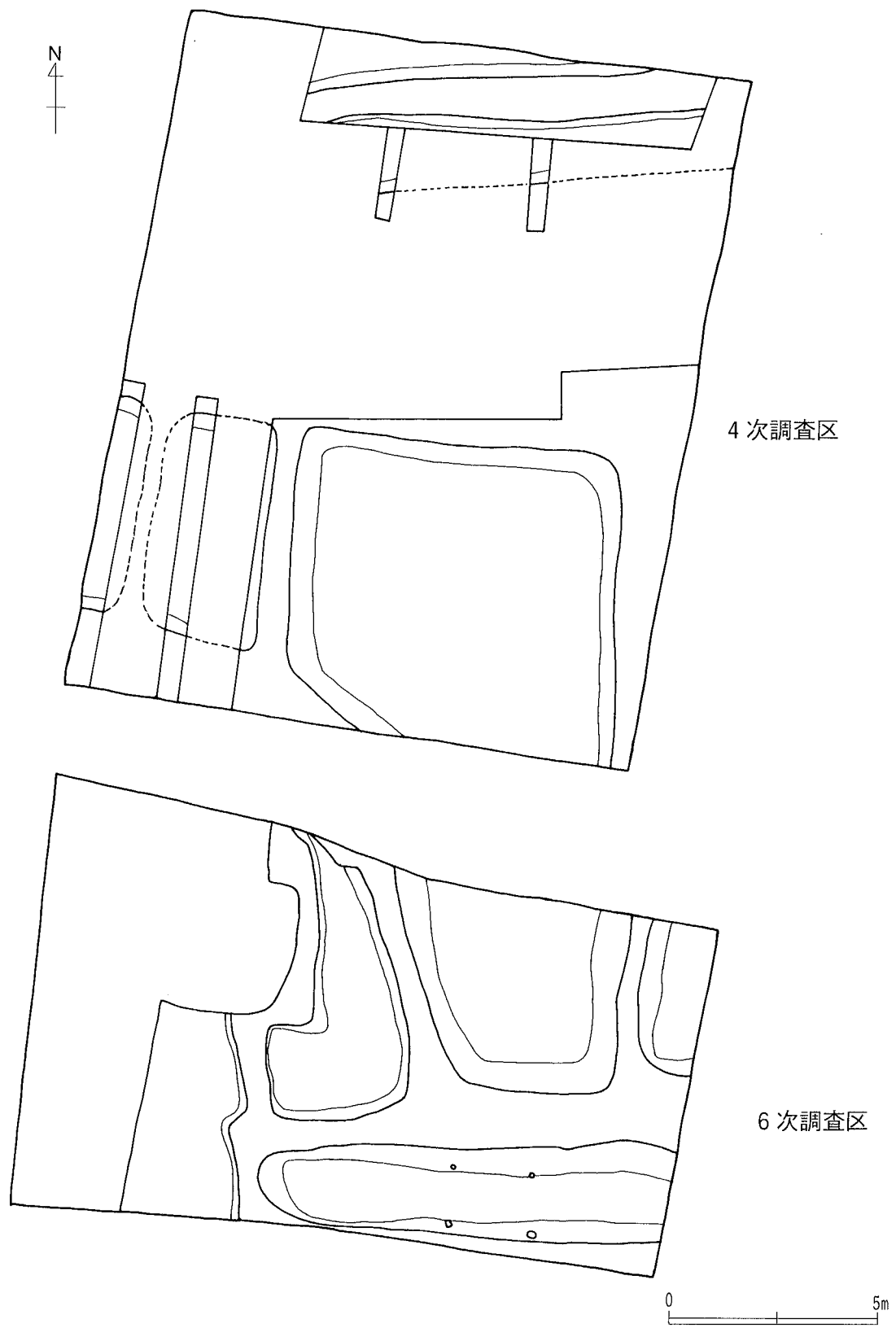
また、深谷に来た時期の資料としては、秋元家の菩提寺である深谷市の元誉寺に残る『元誉寺考古』に「天文十年辛丑春三月、秋元越中守藤原景朝公、自上州移干武州榛澤上野原」とあり、天文10年（1541）に上州より武州榛澤郡上野原（現深谷市上野台）に移って来たと記されている。『秋元家譜』や、それを引用したとみられる、『大里郡郷土誌』や『秋元氏館趾』の碑文等に小糸城から直接深谷に来たとの記述が見られるが、それ以外の資料を見る限りその記載は見当たらなかった。その辺りの事情について『秋元家譜』では「又、小糸ニ秋元氏アリ、天南寺・妙喜寺両寺ノ過去帳ヲ考フルニ、小糸城主秋元宗淳、天正十七年六月十四日ヲ以テ卒スト。景朝天文十年小糸ヲ去リシヨリ四十九年ヲ隔テリ、思フニ小糸ノ秋元ハ宗家ニシテ、景朝ハ支流ナラン。」この文章は景朝が小糸城から直接深谷に来たとの前提にたって記述されているが、大切なのは天正まで小糸に秋元の宗家が存続していて、景朝はその支流であるとしている点である。また、『寛政重修諸家譜』の元景（景朝）の系図に上野惣社に所領があると記されていることから、景朝に繋がる分家の秋元家が上杉管領家方の武将として上野惣社に所領を持ち、本拠としていた可能性が考えられる。

秋元家と上野との繋がりについて研究者の中には、景朝が上杉憲政の養女春を室としていることから、上野平井城の関東管領山内上杉家と強い結び付きを指摘し、秋元景朝を山内上杉家からの付家老的な存在と想定している（深谷上杉顕彰会1996）。

実際に、景朝が上野から来たとされる天文10年前後の状況は、後北条氏の関東進出が激しくなった頃と一致する。各地で上杉氏と後北条氏の戦闘が繰り返され、大永4年（1524）に北条氏綱は江戸城を奪取し、武蔵支配の拠点を手に入れ、追われた扇谷上杉朝興は河越城へ敗走した。天文6年（1537）には朝興の跡を継いだ朝定が北条氏綱の攻撃を受け本拠河越城を放棄し松山城へ逃げ込んだ。後北条氏の関東進出が河越まで及んだことで上杉勢の驚異は相当のものであったと思われる。このような状況で、上杉憲政が秋元景朝を深谷に派遣し防衛力を強化しようとしたことは推測し得る。

この様に文献資料や、当時の周辺状況から探るならば、秋元景朝が天文10年以降深谷上杉に仕えるようになったというこれまでの説は肯首し得るところである。そうすると、障子堀が越中曲輪とすれば天文10年（1541）以降に構築された可能性が高いと考えられ、出土遺物の16世紀後半という年代と合致する。

その後北条氏康は天文15年（1546）に有名な「河越夜戦」で両上杉、古河公方連合軍を打ち破り、以後における後北条氏の関東支配の確立を決定的なものにした。上杉憲政が居城平井城陥落により越後国に逃れ、紆余曲折を経て元龜4年（1573）に深谷城主上杉憲盛は北条氏政、氏邦と和睦の誓紙を交わし、事実上鉢形城主北条氏邦の傘下に入るようになった。今



第9図 深谷城跡検出障子堀 (1/150)

回検出された障子堀が後北条氏の影響下に構築されたとすれば、この元亀4年（天正元年・1573）以降ということになる。しかし、出土遺物から見る限り1573年以降の構築とするにはそれ以前の遺物が多く含まれ、出土遺物の主体が日常生活で使用する供膳具、調理用具とすることを考え合わせてみても、瀬戸・美濃の陶磁器を含め天正年代までこれらの日常消費財を大切に保管してその後廃棄したとは考えづらい。

近年各地で障子堀の検出例が増加し、その中で、従来の障子堀＝後北条氏という図式が崩れ、15世紀前半以降に後北条氏・織豊系以外の在地領主の館にも数多く障子堀が検出されている。小笠原清氏は障子堀の研究を積極的に進め、軍学書や1989年当時の各地の障子堀の類型を纏めて、障子堀に対する認識事項として9つの項目をあげている（小笠原1989）。その中で、「障子の機能として保水と戦術の二つがあり」、「城館のよって立つあらゆる条件のもとに採用され」、「土木とりわけ治水技術と密接に関わり」、「その分布は現状では地域によって集中の度合いは異なるものの（中略）基本的には全国的に存在する性格のものであると理解される。」として、第8番目の項目で「（8）したがって障子堀を後北条氏の固有の築城技術として特定はできない。」と論じている。しかし、「発達した堀障子遺構の検出例から見て、後北条氏が特に好んでこれを採用してきた形跡が強く」として、後北条氏のもとで発展してきた点は認めている。また、大石佳弘氏は焼津市小川城遺跡の調査で、低湿地の土木工事に際しその排水対策として仕切りを作り作業効率を上げる必要もあったとし、障子堀を土木工事で必要な存在として位置付けている。実際、深谷城で障子堀が検出された第4次、第6次調査区も北の低湿地にあたり、今も地点によっては湧水が激しく、今回の調査中も排水のためのポンプは常に稼働していた。障子堀が機能していた当時も堀底は常に滞水状態であったことが想像できる。こうしてみると今回の事例も後北条氏云々というより、単に低湿地での堀の作り方の一例と見ることもできる。低湿地の障子堀は堀障子（障壁）が崩れやすく、遺構として残っている事例が少ないという可能性は大きいですが、それでも、低湿地の堀全てが障子堀というわけではない。今回、障子堀＝越中曲輪という前提にたって文を進めてきたが、上述のように近年各地で障子堀の検出例が増加し、障子堀自体の型式編年も確立しつつあり、そうした編年の確立をもって深谷城の障子堀を再検討してみたい。

※第8図の深谷城跡推定図は第3次調査の報告（澤出1991）で作成された推定図に、最近の調査成果（県事業団調査、市教委調査4～6次）を加えたものである。

※引用・参考文献の多くは紙幅の都合により多くを割愛させていただいた。

引用・参考文献

- 小笠原清 1988 「障子堀・堀障子および堀底特殊構造について上」『おだわら』 2
1989 「障子堀・堀障子および堀底特殊構造について下」『おだわら』 3
酒井清治ほか1984 『赤羽・伊奈氏屋敷跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
澤出晃越 1991 『深谷城跡（第3次）』深谷市教育委員会
塩野 博ほか1981 『私市城跡』騎西町教育委員会
鈴木孝之 1996 『深谷城跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
塚田順正ほか1990 『小田原城とその城下』小田原市
平田重之ほか1995 『安保氏館跡』神川町教育委員会
深谷上杉顕彰会1996 『深谷上杉氏史料集』
渡辺 一ほか1982 『花崎遺跡』加須市遺跡調査会



遺跡遠景（南より）



遺跡遠景（北より）

写真図版 2



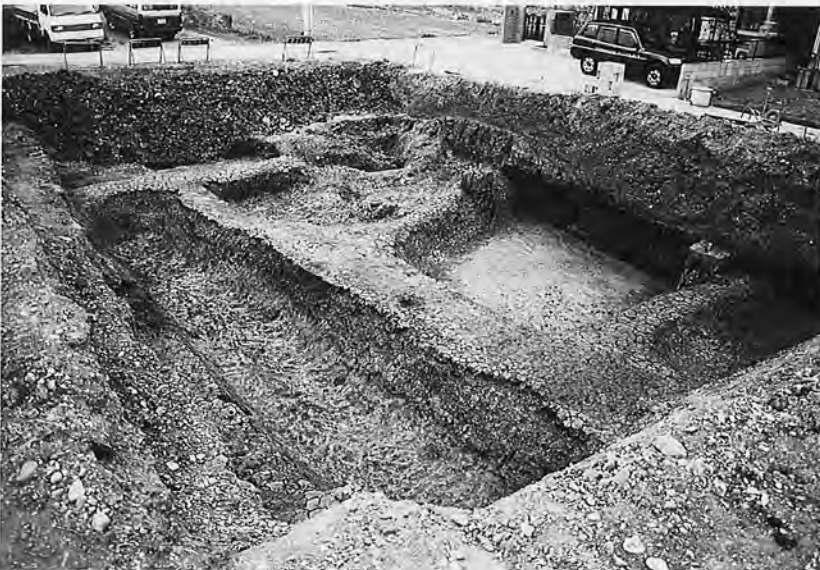
調査区全景（東より）



調査区全景（北より）



作業風景



調査区全景（東より）



調査区全景（西より）

写真図版 4



D区近景



皿出土状況



漆碗出土状況



第4図-1



第4図-2



第4図-3



第4図-5



第4図-6



第4図-7



第4図-12

写真図版 6



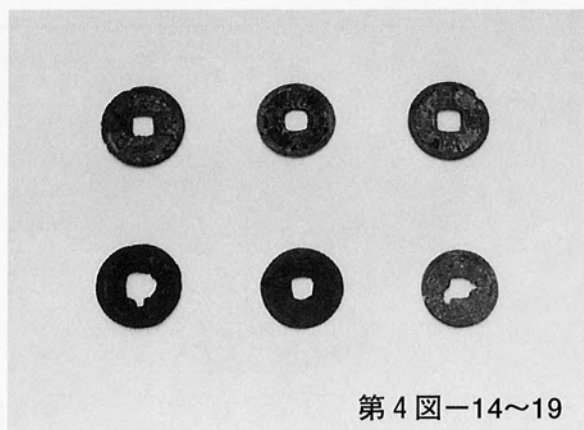
第 4 図— 8



第 4 図— 10



第 4 図— 9



第 4 図— 14~19

報告書抄録

ふりがな	ふかやじょうせき (だい6じ)							
書名	深谷城跡 (第6次)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	青木克尚・櫻井和哉							
編集機関	埼玉県深谷市教育委員会							
所在地	〒366 埼玉県深谷市本住町17-3 TEL 0485-72-9581							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
ふかやじょうせき 深谷城跡	さいたまけんふかやし 埼玉県深谷市 おおあざふかやあざ 大字深谷字 えちゅうくるわ 越中曲輪551-1	11218	108	36 11 51	139 17 21	19960409 ～ 19960507	250	住宅地の造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
深谷城跡	城館跡	中世～ 近世	堀跡 1条		土器 陶器 磁器 木製品 渡来銭 など		第4次調査で見つかった障子堀に連続する障子堀の検出。	

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集

深谷城跡 (第6集)

印刷 平成9年3月24日
 発行 平成9年3月31日
 発行 深谷市教育委員会
 印刷 たつみ印刷株式会社